住吉祭礼図屏風にみる夏越大祓の行列

メモ）鉄本　2023.03.23

1.夏越大祓（なごしのおおはらえ）とは

旧暦6月晦日（明治13年からは新暦7月31日）に、神職以下の者が菅貫（すがぬき）で身体をなで、茅の輪をくぐり、心身の穢れ、罪や過ちを祓い清める神事である。摂津・和泉の大祭として、住吉大社から堺宿院の御旅所との間に神幸が繰り広げられる代表的な夏祭りである。

①神輿洗神事：「お祓い」の前儀として神輿洗（みこしあらい）神事がある。神幸に用いる神輿を茅渟の潮で祓い清める神事である。この神事の日の潮水を浴びると万病が治るという言伝えがある。（7 月20日）

②夏越祓神事： 住吉祭（南祭）は7月30日の宵宮祭に始まり、31日の例大祭、同日夕刻の夏越祓神事と続く。

> 【参考】『住吉大社神代記』には、開口水門神社の「六月の御解除（みはらえ）」と、田蓑嶋姫神社の「九月の御解除」があり、前者は南祭（なんさい）、後者は北祭（ほくさい）と称されている。北祭は、大正4年に廃絶され、現在は 「おはらい」と言えば一般に住吉大社の夏祭りを指し南祭のことである。

③神輿渡御： 8 月1日、4社（底・中・表筒男命の3社と息気長姫命（神功皇后）の1社）の神輿を担ぎ、神主以下は騎馬で、堺宿院頓宮に至る。渡御行列の構成員は、総官（神主）、権官、氏人、神官、権少祝、神馬である。住吉祭礼図にみるような町衆のよる練物行列の始まりは不明であるが、安土桃山時代以前の記録類には見られないので江戸期以降の始まりとみられている。

＊「神官」： 神職のこと。祭主、大宮司、少宮司、禰宜、権禰宜、宮掌（くじしょう）の別がある。

＊「権官」： 律令制の正官（せいかん）に対して、臨時的な地位として任命される官職。

＊「氏人」： 本来は氏神に奉仕する同族であるが、後年は直接に祭の役に任ずる少数の者を称した。

＊「権少祝」： 祝（はふり）とは神職の一つ。大祝、権祝、副祝などの名称があり禰宜の次位。

④荒和大祓（あらにごのおおはらい）： 宿院頓宮の飯匙堀で「荒和大祓」を行う。「荒和大祓」とは、荒魂・和魂の両面をともに祓うことにより心身のすべてを祓い清める神事。

2. 神幸行列 （練物）

以下に、「住吉祭礼図」に描かれている人物を順に列挙する。

2. 1　猿田彦：

猿田彦の役割には、「神迎え」と「先払い」の2つの側面を持つ。猿田彦は、鼻高・赤面の性的力と眼光の「邪視」、そして、鉾によって悪を払いつつ行列を先導する。 左図は「住吉祭礼図屏風」の猿田彦。右図は『住吉名勝図会』に描かれている猿田彦。平安時代には、行列の先導役と神輿の先導役の区別があったが後世には混同されている。

（1）猿田彦の属性： ①国つ神　②衢の神（天上と地上の間、道が分かれる所の神） ③天つ神の道案内（天孫降臨の立役者） ④アメノウズメと夫婦になり、その子孫は猿女君を名乗る。⑤比良夫貝（シャコガイ）に挟まれて伊勢で死亡。

（2）容貌： ①鼻高（伎楽の面） 性的力による敵の撃退 ②サル面　動物界と人間界の境界に棲息する

存在としてのサルを象徴　③眼光（目は八咫鏡、眼光は赤いほうずき様）「邪視」によって外敵を防ぐ。

(3)「サダル神」＝「猿田彦」伝説：「サダル神」は宮古島の祖神（うちがん）祭の先導の神。沖縄では花嫁道中の先頭で提灯を持って行く仲人を「サダリアムシタレ」という。この「サダル」が「サルタ」に転訛したという説がある。

2．2　社人（しゃにん）：

神社に仕え、一般に雑務に従事する下級の神職。☞

2．3　神官と社僧：

☜左は神官（立烏帽子と狩衣の姿）

☜右は神宮寺の社僧（菅の立山笠と法衣の姿）

上図は『住吉名勝図会』に描かれている神官冠が垂纓冠になっている。

・総官（宮司）は束帯の正装姿

垂纓冠（すいえいのかん）

縫腋（ほうえき）の束帯

2．4　神馬（しんめ）と馬長（うまおさ）：

「住吉祭礼図」には描かれていないが、『住吉名勝図会』には神馬と馬長が描けれている。

馬長とは、御霊会の神事に朝廷から奉られる馬に乗った人で、小舎人童などを美しく着飾らせて神馬に乗せた。

社僧か？

アハラヤか？

2．5「アハラヤ」：

＊「アハラヤ」については別資料（2022.9.29）にまとめた。

祓いを職掌とした斎人（巫女）で、「アガチコ」、「アマガツ」と呼ばれる祓いの依代とされた。「アハラヤ」は「荒和（アラニゴ）大祓」からきたという説がある。

3．荒和大祓

大祓は社会的な浄化を求めるものとして、大宝令では6月・12月の晦日に文武百官が朱雀門に参集し、中臣が祓詞を宣し、卜部が解除（はらえ）を行う規定であった。

堺宿院頓宮に神幸すると、①神輿を拝殿に奉安し祭典　②飯匙堀で菅貫（すがぬき）、茅輪などの祓具を

用いて「荒和大祓」を修め　③斎女（いつきめ）が桔梗の造花を奉納する。
斎女は赤留比売命（あかるひめのみこと）神社の氏子の家から出され、元来は、赤留比売命神を祭る人とされた。

赤留比売命神社（平野区）

＊赤留比売命神社は住吉大社の末社。
＊桔梗は比売許曽神社の社紋。

4. 芸能の奉納

神官御祓いの後、猿楽、舞楽、東遊（あずまあそび）、田楽などの芸能が奉納された。

4．1　猿楽：

奈良時代に渡来した散楽（さんがく）が始まり。散楽は、中国では民間雑芸の総称で、物真似、曲芸、軽業、奇術。魔法など幅広い芸態をもつものであった。日本では国家が保護したが、次第に一般化した。サンがサルに音韻変化し、猿の物真似芸から「猿楽」と称されることになったと言われる。

4．2　東遊（あずまあそび）：

平安時代からの歌舞の一種。初めは東国地方の民間の歌舞であった。後に、宮廷に採用されて形を整え、寺社の祭礼にも奏される。舞人が4又は6人。高麗笛、篳篥（ひちりき）、和琴を用いて笏拍子（しゃくびょうし）を打つ。東舞ともいう。

高麗笛

笏拍子

画像の出典：宮内庁式部職楽部

和琴

篳篥

楽器映像の出典：文化デジタルライブラリー

4．3　田楽：

初めは、田植などの農耕儀礼に笛・鼓を鳴らして歌い舞ったものに始まる。鎌倉から南北朝時代にかけて、能も演ずるようになったが、後に衰え、寺社の行事だけに伝えられるようになった。

【参考文献】・上方文化研究センター『研究年報　第５号』「堺の祭りと信仰」 吉田豊　大阪女子大学
・『住吉と宗像の神』 上田正昭　編　筑摩書房　1988
・『住吉信仰』 真弓常忠　朱鷺書房　2003
・『謎のサルタヒコ』 鎌田東二　編著　創元社　1997
・『サルタヒコの旅』 鎌田東二　編　創元社　2001
・『大阪春秋　第７号　大阪のまつり』 新風書房
・『住吉名勝図会』　・『住吉松葉大記』
・講演録「（グラーツ本）住吉祭の行列」 黒田一克　関西大学学術リポジトリ　2009
・HP 「住吉祭の堺渡御」